

トルコ語目的節の多義性についての一考察*

青山 和輝

k.aoyama.macho@gmail.com

キーワード：目的節 意図性 結果状態 様態 条件 可能 トルコ語

要旨

トルコ語目的節の多義性を、目的の概念分解により説明する。*için* は意図性と対象志向性をコードする形式で、そのため原因を兼ねる。*üzere* は仮定的結果を志向する形式で、そのため目的・結果状態・様態・条件など必ずしも意図性を含意しない用法を担う。引用標識 *diye* は解釈において引用節の内容に大きな影響を受け、目的節としては副次的である。また概念分解により、各形式が *irrealis* の補部を取ることはじめて目的の解釈を得ることも適切にモデル化される。

1. 目的節の概念的定義

トルコ語には目的節と呼べる構造が幾つかある。*-mA(k) için, -mAk üzere, IMP/OPT diye, -mAyA* の4形式である¹。これらの形式はいずれもある種の目的を表現することができる。

- | | | | | | | |
|-----|----|-------------------|--------------------------|--------------------|---------------|-----------------|
| (1) | a. | [<i>Ali-yile</i> | <i>görüş-mek</i> | <i>için</i>] | <i>okul-a</i> | <i>git-tim.</i> |
| | | PN-with | see-VN | for | school-DAT | go-PST.1SG |
| | b. | [<i>Ali-yile</i> | <i>görüş-mek</i> | <i>üzere</i>].... | | |
| | | PN-with | see-VN | for | | |
| | c. | [<i>Ali-yile</i> | <i>görüş-eyim</i> | <i>diye</i>].... | | |
| | | PN-with | see-OPT.1SG | QUOT | | |
| | d. | [<i>Ali-yile</i> | <i>görüş-me-ye</i>].... | | | |
| | | PN-with | see-VN-DAT | | | |

私は [アリと会うために] 学校へ行った。

一方でこれらの形式間には、意味の中核的要素や統語的特性に関して大きな違いがある。本稿はその記述を試みる。そのためにまず、曖昧でしばしばアプリアリに前提されがちな「目的」概念を整理する。2節では Schmidtke-Bode (2009: 19)²を参考に、目的を4つの概念的構成要素に分解する。3節ではその構成要素のどこに焦点を当てるかにより、上述の各副詞節の意味的特性、特に多義性について適切な分析を試みる。

* 本研究は JSPS 科研費 JP17J09752 の助成を受けている。

¹ なお、*amaç* 「目的」 *maksat* 「意図」 *uğur* 「希望」など語彙の意味のうちに目的を内包している名詞を用いた *amacıyla, maksadıyla, uğuruyla* などの表現は今回取り上げない。

² 目的節の類型論 Schmidtke-Bode (2009) ではトルコ語も扱われているが、*için* のみで *üzere* 以下への言及がない。これはデータ不足と考えられる。彼は Descriptive Grammars シリーズ所収 Kornfilt (1999) をデータとして用いているが、この 1.1.2.4.2.3 節 (‘Purpose’) に挙げてあるのが *için* のみなのである。確かに *üzere* の目的用法も 2.1.5 節 (‘Postpositions’) で言及されているが、こちらは採用されていない。

なお、引用した例文のグロスの本論文の方針に合わせて標準化している。

2. 目的節の多義について

Schmidtke-Bode (2009: 18–19) は目的の概念構造として図1を提示する。目的表現により表されているのは、自らの意図にかなう事態の実現を目指して行為を行うさまである。このとき目的の中心的な概念的構成要素は、意図性 (intentionality)、対象志向性 (target-directedness)、未来志向性 (future-orientation)、仮定的結果状態 (hypothetical result state)であり、このすべてを満たすものが典型的な目的表現ということになる。

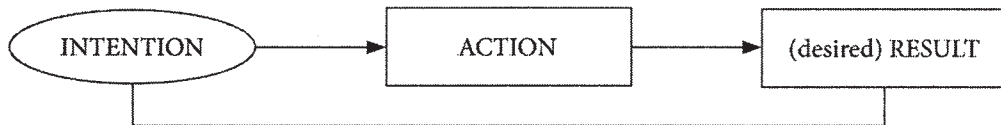


図1. 目的の概念構造 (= Schmidtke-Bode2009: 19, fig.2)

しかし、いわゆる目的節が必ずしもこれらすべての要素をコードしているわけではない。結論を先取りすると、*için* は構成要素のうち意図性と対象志向性に焦点をあてた形式、*üzere* は仮定的結果状態に焦点を当てた形式である。*diye* は本質的に引用形式であり、思考内容を明示するという点で意図性を担うとも考えられるが、結局のところ解釈は引用する命題内容に大きな影響を受ける。

構成要素のうち、未来志向性は目的標識そのものではなく、その補部に担われる。つまり各標識 (*için*, *üzere*, *diye*, *-e*) は *irrealis* な補部と組み合わせはじめて目的の解釈が可能となるのであり、*realis* と組みあわせるとそれぞれ全く別の解釈をもつ。改めて例 (1) を観察すると、(1a, b, d) は動名詞-*mA(k)*、(1c) は願望法-*Aylm* が用いられているが、これらはいずれも *irrealis* な形式である。

なおトルコ語では動詞句を名詞化する際、形動詞-*DIK/AcAK* が *realis* を、動名詞-*mA(k)* が *irrealis* を担う (Csató (2010) などを参照)³。例 (2) は動詞 *söyle*-「言う」の補部における最小対であり、*irrealis* の (2a) は指示、*realis* の (2b) は事実の報告を行う表現である。

- (2) a. (Onun) *gel-me-si-ni* *söyle-di.*
 3SG.GEN come-VN-P.3-ACC tell-PST.3
 ‘(S)he said that (s)he should come.’ (Csató2010: (16))
- b. (Onun) *gel-diğ-i-ni* *söyle-di.*
 3SG.GEN come-PTCP-P.3-ACC tell-PST.3
 ‘(S)he said that (s)he had come.’ (Csató2010: (15))

³ 両者は統語的にも異なっている。ざっくり言うと、-*DIK* は常に節内主語を必要とし、人称標識として所有接辞を伴うが、-*mA(k)* はそうではない。節内主語が不特定であったり、主節主語と同一である場合には所有接辞を伴わず-*mA(k)*で済ませ、節内主語を明示する必要があるときは-*mA*に人称接辞を続ける。

3. 各目的節の意味的な核を特定する

本節では、各目的節標識 (*için*, *üzere*, *diye*, *-e*) が、4つの概念要素のうちどれをコードし、どれをコードしていないのか分析していく。主たる判断基準は2つ: ある概念要素を欠いた解釈が可能か、他標識と対照したときにどのような意味合いの差が感じられるか。

3.1 için

トルコ語の典型的な目的節標識であり、特に意図性・対象志向性を担う標識である。語源⁴的には *uç-u-n* ('reason-P.3-with') からなる後置詞で、補部が *irrealis* だと目的、*realis* だと原因を表す (原因を表せるということは、*için* は仮定的結果状態をコードしていない)。目的節の主語が主節と異なる場合は、動名詞に所有接辞を付加して明示することができる (例(4))。

- (3) *Hasan kitab-ı [sana ver-mek için] al-di.*
 PN book-ACC 2SG.DAT give-VN for buy-PST.3
 'Hasan bought the book [in order to give (it) to you].' (Kornfilt1999: (298))
- (4) *Hasan kitab-ı [sana ver-me-m için] al-di.*
 PN book-ACC 2SG.DAT give-VN-P.1SG for buy-PST.3
 'Hasan bought the book [in order for me to give (it) to you].' (Kornfilt1999: (299))

için 目的節を用いると一種の必然性が含意される。つまり (1a) であれば「アリが学校にいることは分かっており、学校に行かなければアリには会えない」、(3) では (当然ながら) 「買う以外にあなたに本をあげられる方法はない」という含みがある。

また連体修飾できる唯一の目的節であることも注目に値する。*için* 節は道具などの名詞について「~ための」の解釈を得るが、これは *üzere* や *diye* では不可能である。

- (5) [*masa sil-mek için*] *bez*
 table wipe-VN for cloth
 [テーブルを拭くための] 布

名詞句をとった場合も同様に目的/結果の解釈を得るが、これ以外に評価基準を示す「~にとって」の解釈があり、日本語の「ために」とは異なり負の評価を表す語句とも問題なく共起する。英語の *for* にも同様な多義が見られることを鑑みると、目的と同一視してよいのか、関連性をどう捉えるかが課題である。

- (6) *benim için* 「私のために [目的/結果]、私にとって [評価基準]」
 1SG.GEN for

3.2 üzere

次に *üzere* は *öze-re* ('up-toward') に由来するが、もはや空間的な意味を失った後置詞で、補

⁴ 本稿で挙げる各標識の語源は Korkmaz (2014) による。

部が *irrealis* なら目的や様態などを、*realis* なら様態 (なぞらえ) を表す⁵。目的節の主語は基本的に主節主語と同一であり、例 (4) のような異なる主語の目的節はふつう作らない。

-mAk üzere には目的以外の様々な用法が見受けられ、*için* のように意図性を核として整理することは不可能である。

〔仮定的結果状態〕結果状態を志向する表現であるが、結果の実現までは含意しない。目的の解釈はこの用法に吸収するべきかと思われる。*için* とは異なり、*üzere* には必然性のニュアンスはなく、ひとまず決められた計画にのっとなって動いている、といった意味合いがある。

- (1b) [Ali-yle görüş-mek üzere] okul-a git-tim.
 PN-with see-VN for school-DAT go-PST.1SG
 私は [アリと会うために] 学校に行った。(再掲)

〔様態〕行為遂行中の様態を規定するもの。以下の例は、走った結果「汗をかかない」のではなく、「汗をかかない」やりかたで走ることを述べていると考えるほうが自然であろう。

- (7) [Terle-me-mek üzere] koş-tum.
 sweat-NEG-VN for run-PST.1SG
 [汗をかかないように] 走った。

〔条件〕「～という条件で」「～という約束で」と訳せる表現で、節内の出来事が実現することを前提として、主節の出来事を行う状況を示す。節内の出来事が主節の出来事に後続するという時間的前後関係は目的と共通であるが、ここでも意志性は感じられず、そのような計画のもとで動くさまが表現されている。通例主節と *üzere* 節の主語は同一だが、コンサルタントによると、主節と主語の異なる例(9)は自ら産出しないまでも理解可能とのことである⁶。ただし *üzere* により表現できる条件の幅はかなり狭く、条件形-*se* を用いれば表現可能な例 (10) も容認不可能となる。

- (8) [Yarın geri ver-mek üzere] bu kitab-ı al-abil-irsiniz.
 tomorrow back give-VN for this book-ACC take-able-AOR.2PL
 [明日返すということで] この本を持ち出してもかまいません。

(東京外国語大学トルコ語専攻編 2012: 203)

⁵ なお述語位置で *-mAk üzere* は「～しそうだ、～するところだ」という意味で用いられる。これは連体修飾する場合、(ニュース見出しなどを除けば) ふつう *-mAk üzere olan* とコンピュータを挟む。

- (i) Çocuk okul-a git-mek üzere. 「子供が学校に行くところだ」
 child school-DAT go-VN for
 (ii) [okul-a git-mek üzere ol-an] çocuk 「学校に行きそうな子供」
 school-DAT go-VN for be-PTCP child

⁶ 興味深いことに、同じく動名詞に所有接辞のついた形式であっても、主節主語と目的節主語が同じ次の文は例 (8) より許容度がかなり高いという。条件用法に関してはいまだ不明な点が多い。

- (i) [Yarın geri ver-me-n üzere] bu kitab-ı al-abil-irsin.
 tomorrow back give-VN-P.2SG for this book-ACC take-able-AOR.2SG
 [明日返すということで] この本を借りてもいいよ。

- (9) ? [Son-u-na kadar oku-ma-n üzere] bu kitab-ı ver-ebil-irim.
 last-P.3-DAT to read-VN-P.2SG for this book-ACC give-able-AOR.1SG
 [あなたが最後まで読むなら] 私はこの本を貸してあげられます。

- (10) * [Senin parti-ye git-me-n üzere] ben de gid-erim.
 2SG.GEN party-DAT go-VN-P.2SG for 1SG too go-AOR.1SG
 intended: [君がパーティに行くなら] ぼくも行く。

以上の用例を含めて統一的に解釈するには、*üzere* は第一に仮定的結果状態を志向する標識であり、目的や様態、条件の解釈はそこから派生するものと捉えるのがよいだろう。*üzere* 節は目的の概念的構成要素の一つを有するため、副次的に目的節として機能することが多いということである。

なお、*üzere* はニュースなどのかたい文体でちょうど *için* の代わりのように用いられる。これには *için* の持つ意図性を薄める機能があると考えられる。文体差については慎重な調査が必要だが、ともかく *üzere* が意図性をもたないことを補強する論拠にはなるだろう。

一方、補部に *realis (-DIK)* をとると、既に起きたことに言及し、それと同じように行為を遂行するという様態・比喩⁷の解釈を受ける。この場合は一般に異なる主語を許容する。

- (11) daha önce belirt-il-diğ-i üzere
 more before state-PASS-PTCP-P.3 for
 前に述べたように

結果状態と様態のオーバーラップは日本語の「ように」にも見られるが（前田 2006、日本語記述文法研究会編 2008 など）、これをどう捉えるかは今後の課題である⁸。

3.3 IMP/OPT+diye

次に *diye* は *di-ye* ('say-CV') と分析できる引用標識で、これに願望法 (optative) や命令法 (imperative)⁹ といった *irrealis mood* を組み合わせると、目的節として機能する。

⁷ トルコ語の比喩の後置詞といえど何をおいても *gibi* で、*-DIK gibi* には比喩「～のように」「～と同様に (as well as)」, 時間的前後関係「～するやいなや」などの用法がある。

(i) *Pasta-yı [anne-m-in anlat-tığ-ı gibi] yap-ma-ya çalış-tım.*
 cake-ACC mother-P.1SG-GEN describe-PTCP-P.3 as make-VN-DAT try-PST.1SG
 'I tried to make the cake [the way my mother had described].'(G&K: 477)

gibi は *üzere* よりも (意味的にも統語的にも) 柔軟な様態表現を作るし、G&K には *üzere* の様態用法に言及がない点も、これが *üzere* の中心的用法でないことを示唆している。

⁸ Huddleston & Pullum (2002: 968-969) では以下の例が *so that* の様態 (manner) 用法として挙げられている。確かに「植物のてっぺんだけ見える」という結果状態を目指して行為を行っていくわけであるから、その点動作の様態を規定しているともいえるが、本節のように細分化するなら結果状態用法とみなされる。

Manner: *I apply the hay so that only the tops of the plants show above it.*

Purpose: *I disconnected the phone so that we could talk undisturbed.*

⁹ トルコ語の *volitional utterance* を担う形式をどう分節し、分類し、命名するかは諸家により異なる。ここでは G&K に近い分類法をとった。

- (12) [*Kışım üşü-me-yelim diye*] *kalorifer yap-tır-dık.*
 winter be.cold-NEG-OPT.1PL QUOT central.heating make-CAUS-PST.1PL
 [冬に凍えないように(と)], セントラルヒーティングを付けてもらった。(G&K: 463)

- (13) [*Siz bu kış üşü-me-yin diye*] *fiyat-lar-ı indir-dik!*
 2PL this winter be.cold-NEG-IMP.2PL QUOT price-PL-ACC lower-PST.1PL
 [皆さまがこの冬凍えないように(と)], 値下げいたしました!

- (14) [*Üşü-me-sin diye*] *ona battaniye ver-dim.*
 be.cold-NEG-IMP.3 QUOT 3SG.DAT blanket give-PST.1SG
 [彼が凍えないように(と)], 私は彼に毛布をあげた。

目的用法の *için* と *diye* に大きな意味の違いはなく、多くが書き換え可能だが、コンサルタントによると、*için* を用いた (15a) は「私」がすでに凍えていて、これを食い止めようという状況にそぐう一方、*diye* を用いた (15b) では「私」はまだ凍えておらず、予防的に毛布を渡すという違いがあるという。

- (15) a. [*Üşü-me-me-m için*] *bana battaniye ver-di.*
 be.cold-NEG-VN-P.1SG for 1SG.DAT blanket give-PST.3
 b. [*Üşü-me-yeyim diye*] *bana battaniye verdi.*
 be.cold-NEG-OPT.1SG for 1SG.DAT blanket give-PST.3
 彼は[私が凍えないように] 私に毛布をくれた。

なお、1人称願望法 *-Ayım, -Allım* は通常「～しよう、～しましょう」の意で用いられる提案の形式として知られる。例 (12) のように主節主語と *diye* 節主語がともに1人称である場合はこのニュアンスと整合するが、主節主語が2/3人称になる例 (15b) のような場合、解釈の際に提案・勧誘に引きずられないよう注意が必要である。

一方で *diye* は *realis mood* と組み合わせられ、多様な意味を生じる。例(16)は原因節で、解釈(i)は *için* と置き換えても生じるが、解釈(ii)「てっきり...だと思って」は *diye* 独特のニュアンスである (G&K: 462)。

- (16) [*Kalabalık ol-acağız diye*] *bir ekmek daha al-mış-tım.*
 crowded be-FUT.1PL QUOT 1 loaf more buy-PF-PST.1SG
 (i) ‘[As there were going to be a lot of us], I had bought another loaf.’
 (ii) ‘[Thinking there were going to be a lot of us], I had bought another loaf.’

引用標識 *diye* の根本的な役割は、行為に伴う思考を明示することに過ぎない。*realis* と組み合わせても単に想定を示すのみで、目的とは解釈されない。願望法・命令法はもともと非常に目的と近い形式であり(話し手の意志性、未来志向性、仮定的結果状態を満たしているだろう)、この大きな助けを得ることで初めて *diye* は目的節と解釈されうるのである。

3.4 -mAyA

上で見た3形式とは異なり、主節の動詞が *git-*「行く」/*gel-*「来る」で、かつ目的節と主語が共通であるときに限り、動名詞与格形 *-mAyA* で目的を示すことができる (G&K: 479)。主節の制約が厳しく、目的節として慣習化しているとはいえない。

例 (1d) のような動名詞 *-mA* だけでなく、動作名詞一般について与格で目的の解釈が可能である。ちょうど日本語の「～しに行く/来る」に対応すると考えて差し支えない。

- (17) [Alışveriş-e] *gid-er-ken* *ne* *giy-il-ir?*
 shopping-DAT go-AOR.3-when what wear-PASS-AOR.3
 [買い物に] 行くときは何を着る？

なお *-DIK* の与格形が単独で副詞節を構成することはない。

4. まとめと課題

以上、従来目的節標識とされてきた標識の多義が、各標識の中心的機能と目的の概念的分解により統一的に分析できることを示した。もちろん、本稿の分析可能性を担保する「各標識の全用法に共通する意味素性がある」という前提を疑うことは常に肝要であるが、今回の分析では大きな齟齬は出ていないように思われる。

略号

ACC 対格, AOR 中立, CAUS 使役, CV 副動詞, DAT 与格, FUT 未来, GEN 属格, IMP 命令, NEG 否定, OPT 願望, QUOT 引用, P 所有, PASS 受動, PF 完了, PL 複数, PN 人名, PST 過去, PTCP 分詞, SG 単数, VN 動名詞。

参考文献

- Csató, Éva Á. 2010. Two types of complement clauses in Turkish. Hendrik Boeschoten and Julian Rentzsch (red.) *Turcology in Mainz / Turkologie in Mainz*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag. 107–122.
- G&K: Göksel, Aslı, and Kerslake, Celia. 2005. *Turkish*. London/New York: Routledge.
- Huddleston, Rodney, & Pullum, Geoffrey. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Korkmaz, Zeynep. 2014. *Türkiye Türkçesi Grameri (Şekil Bilgisi) 4.Baskı*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları.
- Kornfilt, Jaklin. 1999. *Turkish*. London: Routledge.
- 前田, 直子. 2006. 『「ように」の意味・用法』東京: 笠間書院.
- 日本語記述文法研究会(編). 2008. 『現代日本語文法 6: 第11部 複文』東京: くろしお出版.
- Schmidtke-Bode, Karsten. 2009. *A Typology of Purpose Clauses*. [Typological Studies in Language 88]. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- 東京外国語大学トルコ語専攻(編). 2012. 『トルコ語文法 初級・中級 [改訂版]』東京: 東京外国語大学生協同組合出版部.

About Polysemy of Purpose Clauses in Turkish

Kazuki AOYAMA

Keywords: purpose clause, intentionality, result state, manner, conditional, possibility, Turkish

Abstract

In this paper, we analyse the polysemy of the Turkish purpose clauses by means of Schmidtke-Bode's (2009) four central conceptual ingredients of purpose. First, *için* is a marker that encodes 'intentionality' and 'target-directedness', therefore it also serves as a causal adverbial marker. Second, *üzere* is a marker that aims at 'hypothetical result state', thence it has many other usages including (hypothetical) result, manner and condition, which do not necessarily imply 'intentionality'. Third, the quotation marker *diye* has little meaning in itself and is greatly influenced by the contents of the citation clause in interpretation. Finally, these forms are never interpreted as purpose clauses unless taking irrealis complements, which is also well-analysed in this model in terms of 'future orientation'.

(あおやま・かずき 東京大学大学院／学術振興会特別研究員)